



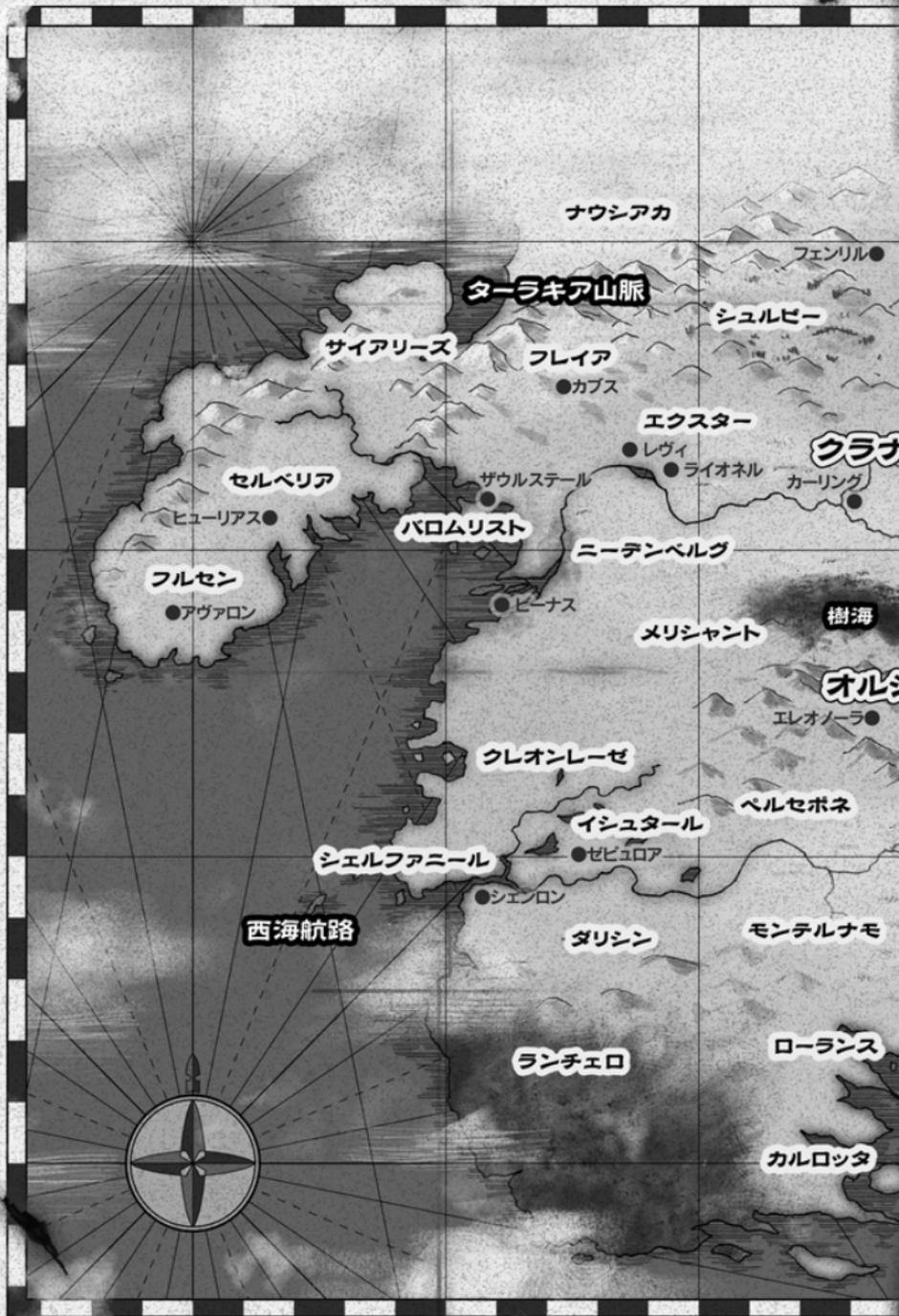
ハレム Mercenary ナリ

小説 竹内けん
挿絵 アライノブ

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェニル

タールキア山脈

シュルビー

サイアリーズ

フレイア

●カブス

エクスター

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

セルベリア

ザウルステール

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーテンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●ビーナス

メリシャント

樹海

オルシ

エレオノーラ

クレオンレーゼ

イシュタール

ベルセボネ

シエルファニール

●ゼビュロア

●シェンロン

西海航路

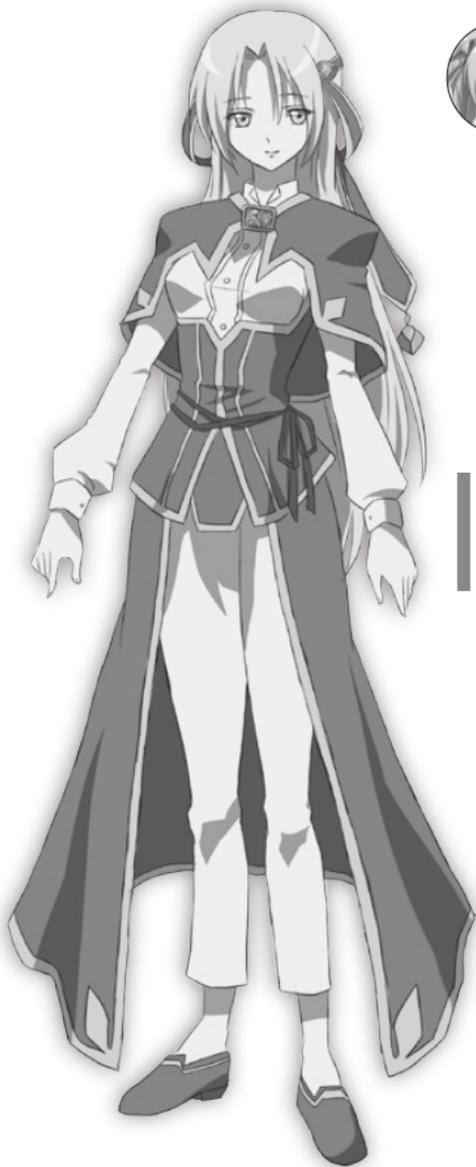
タリシン

モンテルナモ

ランチェロ

ローランス

カルロッタ



登場人物紹介

Characters

エスメラルダ

シャボレー村の村長の娘。かつて自分を救ってくれた騎士のお嫁さんになることを夢見ている。

ヴィルフォール

港町ビーナスの旅籠「緋牡丹亭」で用心棒をしている男。あまり過去のことを語りたがらない。

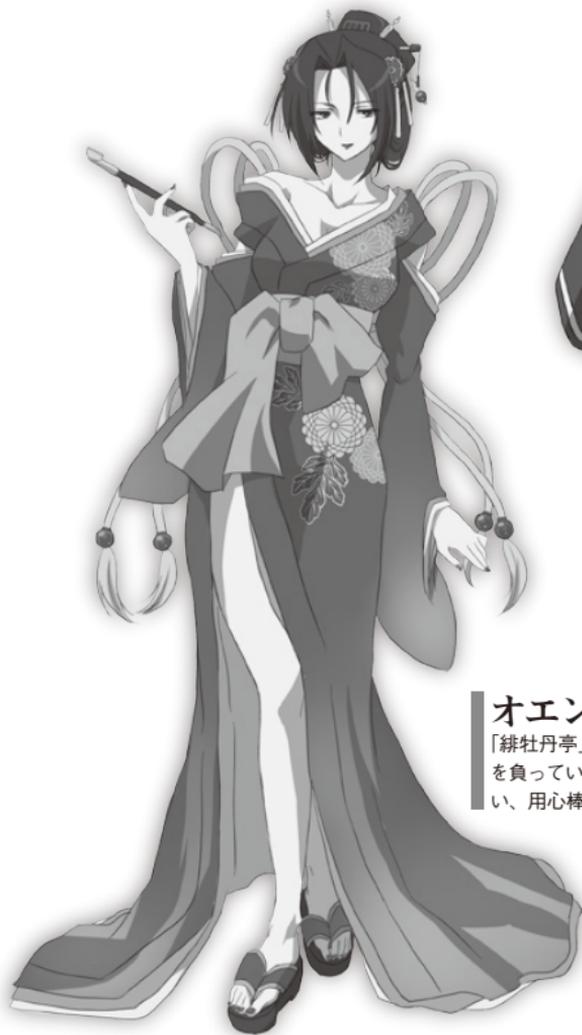
リムティス

エスメラルダの幼馴染みで、村の自警団の団長をしている。刃が分離し鞭のように変化する「蛇腹剣」の使い手。



オエン

「緋牡丹亭」の女将。瀕死の重傷を負っていたヴィルフォールを拾い、用心棒として雇っていた。



第一章	傭兵を雇いたい
第二章	女将の悪巧み
第三章	サクランボの里
第四章	乙女のパワー
第五章	山賊退治
第六章	花芸

そんな二人のやり取りを無視して、ヴィルフォールは天井を見上げた。

（何を期待しているか、何に危機感を持っているか知らないが。おまえらみたいな尻の青いガキに何もしねえよ。それにこれってどう見てもオエンのやつの罠だろ）

オエンに思いつきり遊ばれていることは確かだ。

「ヴィルフォール様、お休みなさいませ」

「不埒なマネをしたら斬る」

リムティスは自慢の蛇腹剣を抱えて布団に入る。

色情に狂っているエスメラルダと、殺気立つリムティスに挟まれてヴィルフォールは溜息をつく。

（まったく、何やっているんだか。こんなの引き連れて遠いシャボレー村まで行って、山賊退治か。いや、そもそも身が持たないんじゃないか）

姦しい娘たちに囲まれて、山賊退治以上に、この二人の対応に疲れそうな未来が予想できて、ヴィルフォールは溜息をついた。

「あの……ヴィルフォール様？」

布団から顔だけ出したエスメラルダは、頬を染めモジモジしながら声をかけてきた。

「なんだ？」

「わたくし、年の差とか気にしませんから♪」

右側からの殺気が一気に増した。

「……」

どう返事をしていいものかわからず、ヴィルフォールが押し黙っていると、自分の布団から足を伸ばしたエスメラルダは、ヴィルフォールの布団の中に入れてきた。そして、足同士をスリスリと擦り合わせる。

（この色情狂娘。状況がわかっているのか？）

エスメラルダなりに一生懸命に誘惑しているつもりなのだろうが、この状況でその誘いに乗れるはずがない。

ヴィルフォールとしても、若い娘、それもこんなにも可憐な美少女に慕われて悪い気はしなかった。

本人にこんなに抱かれる気があるのなら、美味しく頂きたいという気分がないわけではない。

しかしながら、背後には直接的な脅威として、蛇腹剣を抱えて殺気立つ娘。さらに見えない位置からのオエンのプレッシャーも感じる。

息が詰まるような、抜け道のない千日手のような膠着状態の中、夜は更けていく。やがて部屋の襖が開いて、足音を忍ばせながら近づいてきた者がいる。

ふんつと高級感のある香水の匂いで相手の正体は分かった。もとい、この状況で入ってくるような人物は一人しかない。

ヴィルフォールだけではなく、エスメラルダとリムティスもこの闇夜の侵入者の正体を

悟り、またその行動を注視している。

その人影は、ヴィルフォールの枕元に立つと、そつとひざまず跪き寝ている男の顔の近くで紅唇を開閉させる。

「どお、両手に花つてやつは堪能できた？」

「おかげさんでな」

その低い魅惑的な女の声は、当然、オエンのものだ。

「それはよかった。それじゃ三つ目の花といきましょうか♪」

そう言い捨てたオエンは、掛け布団をはぎ取り、代わりに自らを覆いかぶせてきた。

「ちよっ……んっ!？」

驚きの声を上げようとしたヴィルフォールの唇が、有無を言わずに柔らかい唇で塞がれる。

「ん、うむむ、うむ……」

男の上に腹這いになったオエンの舌が、ヴィルフォールの口内に入ってきた。前歯を舐めて、舌を絡める。

ピチャ、ピチュ、ジュル……。

濃厚な接吻が一段落したところで、ヴィルフォールが苦言を呈する。

「おまえ何をつ!？」

オエンの人差し指が男の唇を止める。

「明日から離れ離れになるのよ。名残惜しいでしょ。別れの夜には濃厚に愛してもらいたいって思うのは女として普通感覚じゃないかしら？」

それはまあ、理解できる理屈ではある。しかし、状況が状況だ。周囲ではエスメラルダとリムティスが息を殺して寝たふりをしている。

「ここですか？」

「そう♪」

困惑した顔で質問するヴィルフォールに、オエンは平気な顔で答えた。わかりきったことだが一応、今一度確認してみる。

「二人ともまだ起きているぞ」

オエンは艶やかに笑った。

「だからいいんじゃない。うふふ、二人とも言動の端々まで非常に処女臭くて可愛かったわ♪♪ ここは一つ大人というものを見せつけてやりましょう」

オエンの意図を知ったヴィルフォールは深々と溜息をついた。

「うわ、擦れた大人の女ってヤダね」

「あなたがあちきを擦り切れさせたのよ」

好色に舌舐めずりをしたオエンは、身体の前足を反対にして尻を向けた。そして、男の浴衣の裾をただけさせる。

「うふふ、なんだかんだ言って、あなただって大きくなっているじゃない」

薄暗がりの中、妖艶に笑った美女の纖手によって、男の逸物が愛しげに握りしめられる。「うふふ、このキノコみたいに左右に張ったエラ。これにゴリゴリやられると女はもうたまらなくなっちゃうのよね。まさに女を悶え殺すための逸品。これを足蹴にできるなんて、まったく処女ってやつはものの価値がわからないのよねえ〜」
口唇を開き、濡れた舌を差し出したオエンは、美味しそうに雁かりの周りを左右からペロペロと舐めた。

「くっ……」

男が思わず呻くと、女はさらに鈴割れをなぞったあと、尿道口に尖らせた舌を差し込んできた。

何が始まったのか、左右の娘たちも理解しているようで、息を殺して様子を窺っているのがわかる。

「あらあら、もうこんなに露つゆが垂れてきたわ。ああ、凄いエッチな匂い。牝を誘う牡の香りよ。もう我慢できない」

月明かりの中、舌と剛直の間に透明な糸を引かせ、わざわざ解説しながら、オエンは逸物を頭から啜すすえた。

「あむ、うむ、うむ……」

ジュル、ジュルジュルジュル……

卑猥な水音を立てながら啜り上げ、口内で亀頭部に濡れた舌を絡みつかせながら、唇で

締め、エラを刺激するように、頭を激しく上下させる。

まさに淫乱お姉様の真骨頂。実に巧みな口戯だ。

「まったく……」

生娘相手に濃厚なセックスを見せつけて楽しもうというオエンの意図に呆れつつ、ヴェルフォールもまた、目の前の着物裾をからげてやった。

いきなり女性の大事なところがあらわたなる。着物を着るときにはブラジャーやショーツをつけないのが、正しい着こなしである。

名店の女将であるオエンは当然つけていない。

つやつやとした白い媚脚だ。細くて長いのだが、凹凸にも富んでいる。太腿もすつきりと細くて長い。その付け根、恥丘に黒々とした陰毛が炎のように萌えている。決して見苦しくない。綺麗に処理された生え方だ。

こういうところが大人の女というか、水商売の女っぽい雰囲気だが、美しいことは確かだ。

闇夜に浮かび上がったお尻もすつと引き締まって、ツルツルしている。もとい。お尻に限らない。オエンの肌はどこもツルツルである。

それは素材がいい上に、きつちりと日頃からお手入れしているためであろう。

単なる若さに任せた美しさとは違うのだ。その自信があるからこそ、小娘たちに見せつけてやろう、などという気分になるのだろう。

(まあ、その企みに乗ってやるか)

腹を決めたヴィルフォールは、陰唇の左右に親指をかけて、かばっと開いた。

「あん……」

恥ずかしそうにぶるつと震えたかと思うと、タラタラタラ……と熱い女汁が男の顔に降り注いだ。

「相変わらず卑猥だね、おまえのオマ○コは。よく清純なる処女たちの前で晒す気になる」暗がりの中ではよく見えないが、さもよく見えるように陰唇を観察しながらからかってやると、オエンは喘ぎながらも口応えをした。

「あら、あなた、知らないの？ 処女のオマ○コって臭くて汚いのよ。あちきの方が何倍も綺麗だわ」

オエンがわざと周囲の二人に聞かせているのは確かだ。

聞き耳を立てていた処女娘たちは、プライドを刺激されたのか同時にびくんつと震える。「はいはい。淫乱お姉様には誰も勝てませんよ」

ツルツルの小尻を掴んで引き下ろしたヴィルフォールは陰唇へと顔を埋めた。そして、舌を伸ばすと、陰核から粘膜を通して、会陰部までペロンと舐める。

「あん♪」

塩味が口内に広がった。

暗闇でよく見えないが、勝手知ったる女だ。ヴィルフォールは淫核の包皮を剥いて、中



身をペロペロと舐め弾いてやった。

深夜、月明かりの射し込む部屋で、大人の男女は互いの陰部を舐めあう。

「うぐ、ふむ……、うむむ……」

オエンも夢中になって逸物を啜っていた。頃合いを見計らって、ヴィルフォールは膣穴にぐいっと舌を押し入れて、グリグリと掻き混ぜてやる。

「ああん、いいわ、ああ……そこ……」

喘ぎ声を我慢できなくなったオエンは逸物を吐き出して、気持ちよさそうにのけぞった。どうやら、ひそかに情事を楽しむというのはやめたらしい。オエンはあたり憚らず喘ぎ声を張り上げる。

「あああ、ああ、凄い……♪ そんなところ舐められたら、ああ、我慢できなくなるう！
ああ、気持ちいい、気持ちいい！」

牝としての欲望に忠実に従ったオエンは、両手でシコシコと逸物を抜き上げながら、気持ちよさそうに嬌声を張り上げる。

「イッちゃう!!!」

ピクピクピクピク……。

狼の遠吠えのように美しい肢体を反らせたオエンは、がっくりと脱力する。

それでも唾液に濡れ光る逸物から手を離さない。一段落したところで逸物を弄びながら、オエンは流し目で懇願してきた。

「あんたのこの逞しいの。そろそろ欲しい」

「おまえが上になって、自分で入れな」

ヴェルフォールの答えに、オエンは恨みがましい顔をする。

「あちぎに晒し者になれって言うの？」

「おまえが始めたことだぞ」

男に押搦されたオエンは、諦めの溜息をついた。

「わかったわよ。その代わりたっぷりと楽しませてもらうからね」

身を起こしたオエンは、ヴェルフォールの顔を見ながら、その胴体を跨いだ。股を大きく広げて、いきり立つ逸物を自らの陰唇に添える。

「では、頂くわね」

ちらりと意味ありげに左右に目をくれたあと、ゆっくりと腰を下ろす。

ずぶつと男根が、女体に突き刺さる。

「ああ……いいわ。この極太なおちんちんの味知っちゃったらもう、他の男では満足できなくなっちゃうのよね」

身震いをしながらも、根元まで啜え込んだオエンは、身を弓なりにして恍惚と溜息をついた。

月明かりに妖艶な美体が輝く。

白い頬が桃色に染まり、もともと色気の塊のような女性だったが、逸物を啜えたことで

それがさらにいや増した。

まさに水も滴るいい女だ。

「おまえのオマ○コの中も相当だぞ。ザラザラで男殺しの凶悪な肉壺だ」

オエンの膣穴は入り口がきゅつと締まり、その上膣内全体がヤワヤワと締めてくる。いわゆる巾着型きんちやくの名器だ。

油断していると男をあつという間に絞め殺す魔壺に必死になって耐えながら、ヴィルフオールは両手を伸ばし、オエンの着物の胸元を左右にはだけさせた。

「あん……」

細い艶めかしい両肩があらわとなり、次いでプルンツと弾力ある白い塊が二つ闇夜に躍り出た。

瘦身の割に乳房は大きい。

浮き出た鎖骨のすぐ下から前方に飛び出す乳房は、未成熟なわけではなく、熟しきっているわけでもない。いまが食べごろの極上な果実。

頂きを飾る赤い乳首もピンツと立っている。

汗に濡れた裸身が月明かりに白く輝く。実に艶めかしい。

芸術品のように完成された女体に魅せられたヴィルフオールは、その大きな両掌で、乳房を包み込んだ。

「うん♪ そんなに強く、揉まれたら、ああん♪」

白い柔肌に、ピンクの指の跡が残るほど、ヴィルフォールは意図的に荒っぽく揉んだ。性に慣れたお姉様は、荒々しいのが好きなのだ。自分が男に支配されている、というマゾ的な歓びを得られるらしい。

乳房を揉まれながら、オエンは腰を前後に動かす。

グチュグチュグチュ……。

卑猥な水音があたりに響く。

「ああ、凄い、ゴツゴツ、ゴツゴツしている。気持ちいい。オマ○コが、女のお腹の中がめくれちゃうの。ああ、ズン、ズンって子宮突かれる。子宮でおちんちん感じるっ♪」

大きく開けた口元から涎が溢れて、細い顎を濡らす。

男に慣れた蜜壺がキュッキュツと心地よく逸物を締めてくる。

生娘たちに様子を窺われながらするセックスのため、普段以上に燃えてしまっていることは疑いない。

硬く尖った乳首を、きゅつと強く摘んでやる。

「ああ、そんな引つ張られたら♪ もう、イク、イク、イク、イク、いっちゃう。極太ちんちんでいっちゃう！ イクウウウウ!!!」

ヒク、ヒクヒクヒクヒク……。

両の乳首を引つ張られながらオエンの肢体が激しく痙攣した。

腔洞もまたキュンキュンキュンと、男根を絞り上げてくる。

「おまえらな、何すべてが終わったみたいに寛いでいるんだ？ 俺はまだ満足してないぞ」
「えっ!!」

驚いたエスメラルダとリムティスが、揃って後ろを向くと、そこでヴィルフォールが仁王立ちしていた。

その股間では逸物がたったいま射精したばかりとは思えぬ勢いでそり立っている。

「……おまえら、ここまでやったんだ。覚悟はできているんだろうな？」

「か、覚悟？」

ヴィルフォールのただならぬ雰囲気を察して、牝猫二人の表情が引きつる。

「ああ、このままで終わると思うなよ。二人ともぐってんぐってんにしてやるぞ。山賊どもの慰みものになった方がよかったと思えるほどにな」

凶悪に宣言したヴィルフォールは、牝猫たちのそれぞれ内側の足を持ち上げた。

「キヤツ」

女たちの悲鳴など意に介さず、ヴィルフォールは女たちの美脚を左右の肩に担ぎ上げた。エスメラルダとリムティスは横向きになり、互いの前面を重ね合わせる。

二人ともぱっくりと陰唇を開いている。いずれもドロドロに濡れた蜜壺だ。そこにいきり立つ逸物を近づける。

「まったく、この淫らな牝猫どもめ。ちんちん欲しいんだろ。どっちから欲しいんだ？」

「そ、それはわたくしの方が……」

「あたしだって欲しいです」

いつも紳士的な男の剥きだしの獣性を察して、牝猫たちに畏怖されてしまったようで、いささか震えた声を出す。

「ふっ、安心しな。どっちも頂くさ」

いきり立つ逸物は、まずリムティスの膣穴に叩き込まれた。

「ああ」

ピンクのポニーテールを揺らしながら男勝りの少女は歡喜に震える。

ズッコ！ ズッコ！ ズッコ！

野太い逸物が、ミミズ千匹の蜜壺を容赦なくえぐる。

「い、いきなり、激しい！」

ブル、ブルブルブル……。

リムティスの四肢がビクビクと震えた。

師弟の契約条件として、幾度もヴィルフォールに身を任せてきたリムティスだが、このように一方的に牝として扱われたのは初めてであった。

いままでは優しく扱われていたのだと身に沁みる。

「どうだ。男を舐めるところという目に遭うんだぞ」

「はう、でも、気持ちいいです。ぶっといおちんちんが入ったり、出たり、奥でゴリゴリゴリゴリしていますう」

涎を垂らしながら悶絶するリムティスの顔を間近に見て、エスメラルダは目を丸くする。「すごい、リムちゃんってヴィルフォール様のおちんちん入れられるとこうなっちゃうんだ。可愛すぎる♪」

「うむ♪ うむむむ……」
妙なテンションのエスメラルダは、喘ぎ声を張り上げる親友の顔を抱くと、接吻をした。

喘ぎ声を上げたいリムティスは苦しそうであったが、素直に受け入れる。

しかし、その間もヴィルフォールは容赦なく豪快に、ガツガツと腰を叩きつけ続ける。「うぐ、うぐ、うむ」

若く健康な肢体は、感度も抜群によい。ザラザラの腔洞は、キュッキュツと心地よく逸物を締めつける。

接吻をしながらエスメラルダは、両手でリムティスの乳房を握り揉んでいるようだ。

その手付きはなかなか堂にいつている。同じ女だけにどうすれば気持ちいいのかわかるのだろう。

それどころか接吻を終えると、背を丸めてリムティスの乳首を吸いだした。

「ひい、ああ、そんな……エスメラルダ……いま、そんなことされたら!!!」

男に容赦なく犯されながら、親友に乳首を吸われたリムティスは半狂乱になる。

「ああ、も、もうダメ、イク、イク、イク、イク——ッ!!!」

牝の嬌声を張り上げたリムティスの体内からは熱い滴がシャワーのようにビュウビュウ

と噴き出し、肉棒に浴びせられる。

同時にザラザラの贅肉がキュッキュツと締めまり、男根を道連れにしようと図ったが、その試みは失敗に終わった。

「はう……」

女一人で絶頂させられたリムティスは、ぐったりと脱力する。

「さて、待たせたな次はエスメラルダだ」

絶頂を極め脱力している女の膣穴から、その熱い愛液を浴びて湯気の上がる逸物を引き抜くと、そのまま傍らのエスメラルダの膣穴に叩き込む。

「ふぐっ」

エスメラルダは掲げた白い足を震わせる。

こうやって立て続けに味わうと、膣洞の感覚の違いが鮮明にわかるものだ。

どちらも贅が豊富だが、エスメラルダの方が柔らかくふわふわしていて、リムティスの方がキュッキュツと締めつけてきてザラザラしている。

どちらが名器とか、優劣を付けるようなものではない。どちらも若く健康的な女の蜜壺だ。素晴らしい犯し心地である。

「それ、いくぞ！」

気合いの声も勇ましく男は、一匹目を仕留めたときのように、エスメラルダの膣内もまた容赦なく突きまくった。

「ひいあ、はわわわ、ガツンガツンくる」

リムティスに対する所業を間近に見ただけに、エスメラルダは覚悟ができていたのか、悲鳴が嬉しそうだ。

亀頭の先端には、コリコリとした子宮口の感覚がある。

エスメラルダの膣洞は浅いというか、子宮が下がってきてしまっているのだろう。

「うふふ、エスメラルダも可愛いですよ」

「リ、リムちゃん……」

意識を取り戻したリムティスの顔を見て、エスメラルダは頬を引きつらせる。

当然、このあとに待っている己が身の悦楽地獄が予測できたのだろう。

人を呪わば穴二つ。先ほど自分がした所業が返ってくる。

「はむ……」

陶然とした表情のリムティスは、薄い銀髪の親友のピンク色の唇を奪った。そして、乳白色の乳房に悪戯を開始する。

「ふむ、うむむ、ふむ……」

ドスッ！ ドスッ！ ドスッ！

リムティスの所業は、先ほどのエスメラルダの再現のようであった。育ちが似通っているだけに発想も似通っているであろう。

接吻を終えたリムティスは、背中を丸めてエスメラルダの乳首に吸いつく。

「ああ、す、凄い。し、痺れる♪ 痺れちゃう、あああああ!!!」

ビクン、ビクン、ビクン!

ブツブツとした贅肉が、亀頭部に絡みついて絞り上げる。しかし、ここでもヴィルフォールは耐えきった。

ぐったりと脱力したエスメラルダの膣穴から、ギンギンにそそり立つ逸物を引き抜くと、傍らのリムティスの膣穴に添える。

「え、また……」

「あたりまえだろ。俺はまだまだ満足してないぞ」

驚くリムティスの体内に、ヴィルフォールは容赦なく逸物を叩き込む。

「はう」

そして、また容赦のない突貫攻撃が始まった。

ザク、ザク、ザク……。

「だ、だめ、またイっちゃう!」

ビクビクビク!

鉛色の肌を火照らされてリムティスが絶頂すれば、ヴィルフォールは何事もなかったかのように、乳白色の肌を火照らせるエスメラルダの膣穴に移る。

「やくん、そんな連続だなんて……」

エスメラルダは驚き悲鳴を上げたが、許してやるつもりはない。

野太い逸物は、ズコズコと出入りを繰り返す。

女がイつたら、交代という抽送運動を、ヴィルフォールは営々と繰り返した。

「ひいえ〜……」

「ふみゆ〜……」

当初は親友に悪戯をする余裕もあつたりムティスとエスメラルダだが、次第にそんなことをする余裕はなくなつてしまつた。

圧倒的な牝の体力に翻弄されて、理性を失つた牝たちはただただお互いにしつかりと抱き合う。

「ああん、気持ちいい。おっぱいとおっぱいが擦れちゃう。それにリムちゃんを感じている顔が可愛い♪」

「エスメラルダの感じている顔も素敵です。乳首が気持ちいい。肌が気持ちいい、お腹が気持ちいい♪」

陶然とした表情を浮かべた二人はどちらからともなく腕を伸ばすと、互いの肩を抱くと、顔を近づけて接吻を始めた。

ピチャリ、クチュリ、プチュリ……。

二人は躊躇いもなく唇を重ねて、夢中になつて舌を絡ませ、唾液を交換し、狭間から溢れさせて、頬を濡らした。

「うっ」

その淫らな光景に、ヴィルフォールは生唾を飲む。

(まったく、困った娘どもだ。こんな光景を若いときに見せられたら、あつという間に出していたな)

二人はぴったりと抱き合って、乳房を押しつけあい、腹部を重ね、さらには恥丘を擦り合わせる。

レズに目覚めつつある二人の様子に呆れながらも、同時に牡として昂ってくることを否定できないヴィルフォールは、夢中になって二つの蜜壺を行き来した。

「ああ、凄い、ズンズンって、リムちゃんの中に入っているときも、わたくしの中に入っているみたいに振動がくる」

「あたしもズンズンくる。エスメラルダのオマ○コが膨らんで、師匠のおちんちんが入っているのが伝わって気持ちいい」

本人たちが言うように、二人の身体はまるで一体化してしまっただかのようなようだ。逸物をどちらに入れていても、同じようにビクビクと震えている。

ザラザラブツブツザラザラブツブツ……。

カズノコ天井とミミズ千匹の違いはあるが、どちらの腔洞も実に襞が多い。(まったくくなくという男泣かせな女どもだ。いまからこれじゃ末恐ろしいな)

内心で舌を巻きながらもヴィルフォールは、淫欲に蕩けてしまっている牝猫たちに声をかけた。

「どうだ、この淫乱小娘どもが、男を舐めるとこういう目に遭うんだぞ。少しは懲りたか？」
「は〜い〜……」

ガツガツと獐猛な牡に征服された二匹の娘は、とろんとした様子で素直に頷く。
そのさまに満足したヴィルフォールもまた限界に達した。

「そろそろ出すぞ。どっちに欲しい？」

「え、わたくしに……お願いします」

「あたしにこそ……いっぱいかけてください」

途端に二人は口々に罵りあい始める。

「リムちゃんズルイ。いままでわたくしに隠れて、勉強と称してエッチしまくっていたんでしょ」

「エスメラルダだつて、いっぱい抜け駆けしたじゃないですか」

女の友情というのは、逸物の前では実に儂はかないものらしい。

「まったくしょうがねえ、これなら問題ねえだろ、くっ」

我慢の限界を超えたヴィルフォールは、特に意識することなく欲求の赴くままにエスメラルダの体内で射精した。

ピュッ！

「ひいあ！」

ブル、ブルブルブル……。



二人とも互いの小水を汚いなどと露ほども感じていないようだ。

「まったく若いっていいわね。どんな馬鹿なことでも思い切って挑戦できるんですもの」
少女たちが互いの小水を飲みあうさまを観察して呆れ顔のオエンは、左手で男の逸物を扱きつつ、右手で悠然と杯を重ねた。

※

「で、こつちもそろそろ限界かしら？」

亀頭部をぎゅつと締め上げながらオエンは、ヴィルフォールの顔を覗き込む。

「あんた、実は水芸に弱かったのね。思わぬところであんたの性癖を知ったわ。どお、あちきのおしっこ飲んでみる？」

蛇に睨まれた蛙状態のヴィルフォールは、意のままに動かぬ身体で、必死に首を左右に振った。

「まあ、いいわ。そうそうこの部屋をおしっこ臭くしたら、商売に使えなくなるからね」
莞爾と笑ったオエンは、背後でへばっている小娘たちに声をかける。

「二人ともご苦労様。こつちにいらつしやい」

「はい。オエン姐さん」

脱力していたかに思えた小娘たちだが、オエンの声を聞くと、四つん這いになりながらも近づいてきた。

この一週間余りで、オエンはすっかり二人を手懐けることに成功したということだろう。

「そろそろお楽しみのお辱タイムよ」

「りよ、陵辱……」

オエンの宣言に、ヴィルフォールの顔が引きつる。

「もちろん、女の敵を三人がかりで徹底的に絞りとってあげる」

オエンの湛^たえた表情は、まさに牝豹の表情であつた。

「ちよつと待て」

身の危険を感じたヴィルフォールは必死に訴えたが、もはや後の祭りである。

「師匠、覚悟してください」

「ヴィルフォール様、とつても気持ちよくしてあげますからね♪」

すっかり痴女として出来上がったリムティスとエスメラルダは、それぞれ膣穴に入つていた花束を引き抜いた。

ブシュッ！

中に溜まっていた愛液が糸を引きながら吐き出される。

オエンは着物の裾をからげた。下着を穿かないゆえに、溢れ出す愛液を留めるものがない、白い大理石のような太腿はびっしりと濡れていた。

「まずあちきが手本を見せるわ♪」

「はい。勉強させて頂きます」

「楽しみです」

リムティスにせよ、エスメラルダにせよ、すっかりオエンの忠実な弟子になってしまつていて異議はない。

「うふふ、こんなにビクンビクンさせちゃつて」

胡坐をかくヴィルフォールに背を向けて跨がったオエンは、いきり立つ逸物を自らの陰唇に添えた。

「うん、いきなり入れちゃダメよ。男なんて女に入れさえすれば満足な生き物なんだから、まずは徹底的に焦らす……ああ♪」

亀頭部を肉裂の中に入れて、熱い愛液を浴びせてくるがオエンはそのまま腰を進めようとはしなかった。

「どお、女の中に入りたくて入りたくて、パタパタしている男の表情つてそそるものがあるでしょ♪」

オエンの声に、リムティスとエスメラルダは、ヴィルフォールの顔を覗き込む。

「師匠、情けない顔。これがあの鬼のように強い傭兵だとは誰も予想が付きませぬね」

「わたくしの騎士様が……すつごいエッチな顔してます」

二人は脂汗を流す男の頬をペロリと舐めた。

「うふふ、いくら一騎当千の兵といつても、一皮剥けばこんなものよ。まあ、女もたかがしれてるんだけどね……ああ♪」

オエンは自らの淫核を、男の尿道口に押し込むなどしてしばし遊んでいたが、やがて自

らも我慢の限界にきたらしい。

「それじゃ、そろそろ入れてあげるけど、精いっぱい我慢しなさいよ。せつかく三人で楽しんであげようというのに、いきなり出されたら興醒めよ」

「わ、わかった……」

痺れ葉で動かない身体を必死に動かし、ヴィルフォールは頷いた。

「それじゃ、いくわよ。はあん♪」

ズドンッとオエンは腰を落とした。

ズブズブズブ……。

成熟した熱い贅肉の中に男根は飲み込まれていった。

「はあ……、はあ……、はあ……。さすがにこの極太チンポ、久しぶりに喰らうと効くわ……」

オエンとヴィルフォールは同世代だけあって、腔洞の形と、逸物の形がピッタリと嵌る。

お互いに気持ちいいところが重なりあう。まさに割れ鍋に綴とじ蓋。絶妙な相性だった。

情夫の逸物を堪能しているオエンの姿に、リムティスとエスメラルダが生唾を飲む。

「オエン姐さん、お手伝いします」

「ちょ、ちよつとあんたたちっ?! あん♪」

オエンが止める間もなく、小娘二人組は憧れの妖艶なる美女の胸元をはだけた。

プルンとこぼれ出た完璧な乳房。

その右をリムテイス、左をエスメラルダが手に取ると、頂きを飾る椿色の乳首を口に含んだ。

「ああ、そんなことされたら、あちき、あちき、ああああ♪」

久しぶりの男を喰らっているだけでも十分な刺激であったのに、年若い同性たちに両の乳首を舐めしゃぶられて、オエンは半狂乱になる。

当然、巾着型の膣洞の中の壁も狂ったように締め上げてくる。

(こ、これで我慢しろってか)

驚き慌てながらもヴィルフォールは必死に我慢していると、オエンの方はますます盛り上がったらしく、少女たちの頭をそれぞれの腕に抱いて、夢中になって腰を使ってくる。

「あっ、あっ、あっ……」

意馬心猿いばしんえんとはまさにこれだ。男に慣れた女の鬼腰である。

グチュグチュグチュ……。

卑猥な水音が室内に響きわたった。

「あんたたち、そんな強く吸ったら、ああ、嘔んじゃダメ、いま嘔まれたら、ああ、イク、イク、イク、イク、もういくううう」

「うおおおおおお!!!」

オエンが絶頂した。熱いシャワーがビュウビュウと肉棒に浴びせられる。

女が絶頂すれば、男も絶頂したくなる。男女の身体とはそういう風にできているものだ。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!